

地域資源保全のための計画策定の視点と方法

Viewpoints and Methods for the Planning of the Conservation of Local Resources.

吉田 禎雄 (株式会社ブレック研究所) YOSHIDA, Sadao
(Director in Charge of City and Regional Planning/PREC Institute Inc.)

1. はじめに

本稿の報告テーマは「地域資源保全のための計画策定の視点と方法」である。「地域資源保全のための計画」といっても、「計画」の内容、策定目的、求められる策定効果が様々であろうことは想像できる。

しかしながら、いずれの場合にも、計画策定に際し、共通する重要な事項は、以下の i) ~ v) の5点であると筆者は考える。

i) その地域における「地域資源」の存在のコンテキスト¹⁾を読み解いた上で、ii) 目指す姿(ビジョン)、iii) その実現に向けた取組の基本的な考え方(コンセプト)、iv) 総合的な取組方策(モデル)を一連のものとして計画に定め、さらに、計画内容の検討と併せて、v) 計画の運用結果の検証と検証を踏まえて取組の方向修正を可能とするしくみを構築することである。

本稿は、筆者がこれまで携わってきた関連業務を取り上げて、上記に示した事項を「計画」にいかにかに定めるか、その視点と方法について報告するものである。

2. 本稿で対象とする「計画」、「地域資源」

本稿で対象とする「計画」は主に、地域資源を保全・活用し、地域振興に活かすための取組方策を定める計画であり、法定計画以外の計画も対象としている。また、目標達成期間が概ね10年程度の計画を想定している。

「地域資源」は、文化財保護法に基づき指定を受けた文化財だけでなく、計画の対象区域の「その土地らしさ」を継承する上で欠かせない自然資源、人的、文化的な資源なども含める語句として用いている。

3. 計画策定の視点と方法

(1) 視点1：その地域における「地域資源」の存在のコンテキストの把握

ア. 視点の主旨

視点1は、地域資源を単にリストアップするだけでなく、重要なことは、当該地域の風土における地域資源の位置づけを把握するということである。その際に、地域

資源保全の取組を主に担う地域住民等多様な主体が、当該地域の風土及び地域資源に関する理解を深め、共有することができるように、地域資源を見直す機会を設けることが望ましいと考える。

イ. 報告する業務の概要

その方法例として、山梨県山中湖村での取組を報告する。山中湖村は、平成25年度より、エコミュージアム²⁾の理念に基づくまちづくりを推進している。そのまちづくりの基本的な考え方の一つは、「山中湖村民の暮らしや生活からあふれる魅力を掘り起し、まちづくりに活かす」ことである。

そこで、取組の初年度である平成25年度は、第1段階として、ワークショップ形式で、村民が自ら地域資源(=「宝」)を掘り起す取組を支援した。次段階以降の将来目標像の検討・共有、地域学習、観光等に活用を図ることを目的として、広く地域住民から地域資源に関する情報を収集、整理した。(図1参照)

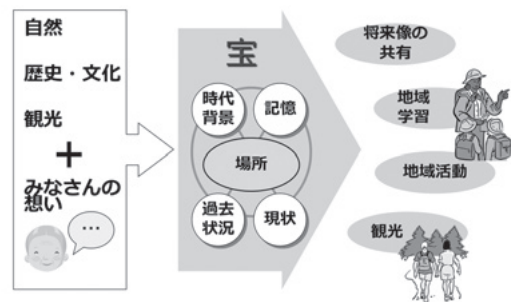


図1. 山中湖村「宝」つなぎワークショップの目的³⁾

ウ. 方法

ワークショップの流れは「第1部 「宝」の掘り起し」、「第2部 「宝」つなぎ」の2部構成である。

第1部のねらいは、「宝」(=地域資源)の場所、「宝」とワークショップ参加者本人との関係・エピソードを把握するものである。地図上に「宝」を示すことで、「宝」と周辺環境の関係把握を助けるとともに、「宝」とワークショップ参加者本人との関係・エピソードを思い出していただくことで、「宝」についての再認識を促すことを目的としている。

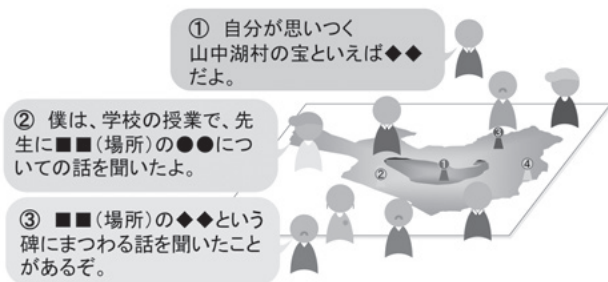


図2 宝さがしの作業イメージ³⁾



図3. ガリバーマップ⁴⁾による作業風景

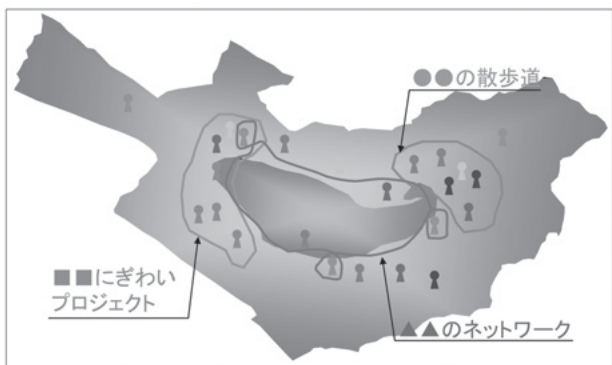


図4. 「宝」つなぎの作業イメージ³⁾



図5. 「宝」つなぎのワークショップの様子

参加者が、ガリバーマップに散在する「宝」を特定のテーマ(当該地域の風土の解釈)でつなぐ(1テーマにつき1本の毛糸で複数の「宝」を結ぶ)様子。



図6. 網目状に宝が結ばれた、「宝」つなぎの結果
「湖が寒さで氷結することによる宝」、「食文化の歴史」など、
様々なテーマで結ばれた「宝」の様子。

第2部のねらいは、参加者自ら、関係し合う複数の「宝」を結ぶ(「宝つなぎ」)ことにある。地域資源は単体で存在するわけではなく、存在する場や他の「宝」と関わりを持ち存在している。かつてはそのような関係性は地域住民に共有されていたが、現代では、産業やライフスタイルの変化等により、資源と場との関係性や、複数の資源のつながりに関する情報を地域内、世代間で継承することが困難となっている。そのため、地域資源がまち中において孤立しているように認識される状況となっている。そこで、本来の、複数の「宝」間の関係による「網目」の状態の可視化を目的として宝つなぎを実施した。

以上の方法により、「地域資源」と住民との関係、場所、風土との関係を調査者が把握できたことに加え、地域資源への住民の関心を高めることも可能となった。

第2段階として、本年度は「宝」の活用方を住民自ら検討することを目的として、「宝」を活用するウォークラリーの企画をワークショップ形式で地域住民とともに立案した。

これは、夏休みに子供たちがクイズを解きながらラリー形式で地域の「宝」を巡り、「宝」を学ぶイベントであり、地域住民が対象とする「宝」を選定して標準ルートを設定し、クイズの内容を検討した。

残念ながら、台風のため、今年の夏休みウォークラリーは延期となったが、この取組は、「宝」を観光に活かす際にも有効であり、一連の企画を住民自らが行ったことで得られたノウハウ・経験の蓄積は、今後の地域資源の保全・活用に役立つと考えている。

「宝さがし」「宝つなぎ」と併せて、地域の主体が自ら持続的に地域資源を保全活用するしくみを構築したことが、「はじめに」のv)で示した、社会経済状況が変化した際に取組の方向修正を可能とするしくみの構築に、将来つながることを期待している。



図7. 住民自らイベント内容を検討している様子

(2) 視点2：地域の将来のあるべき姿（ビジョン）の具体化と実現に向けた取組の基本的な考え方（コンセプト）の立案

ア. 視点の主旨

視点2の「具体化」とは、多くの人々が共有でき、かつ将来像を実現するために必要な取組をイメージしやすく表現することである。本稿では、空間整備のマスタープランとしての具体化ではなく、地域において「自分たちは何をするのか、何を目指すべきか」の具体化として捉えていただきたい。

イ. 報告する業務の概要

その方法例として、沖縄県平良市（現宮古島市）での取組を報告する。平良市は、平成12年度に農村総合整備計画、翌年度同実施計画を策定し、同市狩俣地区において、グリーンツーリズムによる地域振興方策を推進している⁵⁾。

私どもは、平成12年度に農村総合計画の策定支援業務において将来像の検討を行った。当時、農業農村整備は、従来のシビル・ミニマム整備（農業、集落の社会資本整備）から、各地区が地域振興テーマを設定し、オーダーメイドにより必要な整備項目を組み合わせて、事業を展開する方式への移行期にあった。そこで、地域の望ましい将来像を地域住民が共有し、その将来像の実現に必要な取組の検討を行うという計画策定手順が必要となり、従来型の、必要なハード整備のメニュー出しからではなく、地域の将来像の検討から行う手順を採用した。

ウ. 方法

検討手順は図8のとおりである。

当該地域で将来どのような生活を行いたいかについて、懇談会等における地域住民との話し合いの中から地域の人々の思い（重要なキーワード等）を抽出し、望まし

い将来像を物語としてまとめた。

望ましい将来像を複数案作成し、再度地域の懇談会において当該地域にふさわしい将来像を選択いただいた後（図9）、地域資源の保全、活用に向けた各種事業メニューを検討した。

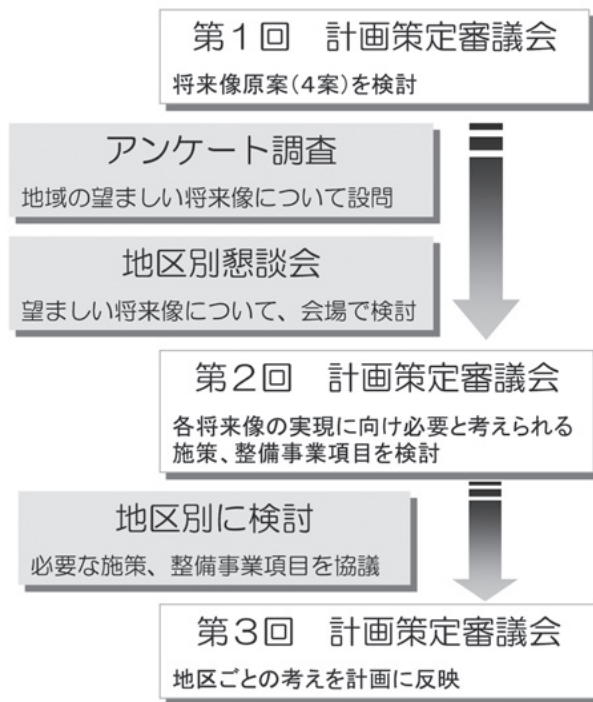


図8. 計画策定手順（網掛け部分が住民意見把握関連）



図9. 地区別懇談会における将来像検討の様子

参加者による旗上げアンケート方式で基本的な意向の傾向を伺い、その後、多く選ばれた案をもとに、地区ごとの具体的な望ましい将来像について懇談。

検討した将来像の1例を図10に示す。この将来像は、集落の1日を表現している。図10のa)～f)に示すように、必要となる取組、整備メニューを将来像から導く構成となっている。

物語は、図8に示した手順で地域住民の方々との懇談の中から地域の方々の思い（キーワード）を抽出して、編集したものである。

地域住民が自ら地域の将来像を具体的に検討したこと

で、「地域資源の保全、活用を行うにしても地域の人々の生業が成り立つことが重要である」という意見が寄せられるなど、地域資源の保全・活用と併せて、将来に思い描く生活を実現するために必要な取組を多岐にわたって検討することができた。

〈ビジョン 物語版〉

そのオーバーは、目の前の情景に微笑んだ。

a) 毎年、サシバが渡る今の季節に、むらをあげての祭りが行われる。b) c) 以前は祭りの主役である「お化け」のなりての不足に悩んだが、いまは志願する若者が多く、「お化け」になるのも容易ではない。

d) 祭りを楽しみに数日前から来ている観光客が、様々な作物が豊かに生長するパリ(畑)や、美しいイノー(礁池)で、むら人たちとともに、草取り、漁に精を出している。

e) ガイド役のオジーとマングローブ散策から戻ってきた観光客が、むらの宿泊施設に向かっている。

「お化け」に泥を塗られて、そこら中から、f) 子供の泣き声が聞こえ始めた。

祭りが始まった。今晚は、集会所でむら人、観光客とともに語らい、一晩中笑い声が絶えそうにない。

〈コンセプト〉※上記下線a)～f)に対応

- a) 自然環境保全
- b) 地域の伝統祭事の継承
- c) 若い世代の定住
- d) 農業、漁業振興、観光交流
- e) 高齢者(地域の達人)の活躍
- f) 次世代の地域の担い手確保

図 10. ビジョンとコンセプトの関係例
(〈ビジョン物語版〉の下線は筆者による)

(3) 視点3：将来像実現のための総合的な取組方策(モデル)の検討

ア. 視点の主旨

視点3は、地区の将来像を実現するための総合的な方策を「モデル」として立案することである。視点2で「コンセプト」として示したとおり、地域資源保全・活用のための取組は多岐に亘り、総花的に定めることになる。



図 11. 遠方に南アルプスの山並みを望み、眼下にブドウ棚が広がる雄大かつ文化的な景観

重要なことは、複数の施策を分野横断的に、総合的な戦略のもとで展開するための道筋を計画策定段階で検討、調整することである。と、記述しているものの、総合的な行政、取組の実践においては多くの壁が存在する。

そこで、計画策定の段階で取組の総合化を意識できるような方策(モデル)を検討することが有効であると考ええる。

イ. 報告する業務の概要

その方法例として、山梨県での取組を報告する。山梨県は平成23年度より、美しい県土づくり推進委員会を設置し、美しい県土づくりのための景観施策を検討している。同委員会での協議結果に基づき、新たな景観施策として「山梨の大観」を活かした地域振興方策を検討した。「山梨の大観」とは、山梨の県土の広範囲を一望のもとに捉えることができるなど、県土の特性を示し、一目見て山梨県であることがわかる風景である(図11参照)。

かつてはそれぞれの地域で共有されていたが、現代に継承されにくくなったものの一つに、その土地と住民との係わり合いの歴史を挙げることができる。古来、人は自然に働きかけて、また自然に即してまちづくり、むらづくりを行ってきており、そこに各地域のまちづくり、むらづくりの「作法」が存在した。このように、人と場所は地区独自の「作法」で結ばれていたが、現代ではそのような作法が忘れられ、人と場所の関係(結びつき)が薄れている⁶⁾。

美しい県土づくりを県民全体で進めるためには、再び、山梨の県土＝「場所」と県民一人ひとりの「心」を結びつけることが重要である。そこで、「場所」と「心」を結びつけるものとして、同委員会は「山梨の大観」に着目した。

ウ. 方法

県民の誰もが「山梨の大観」を意識することで、山梨の県土と「心」を再度結ぶことができるように、「大観」を体験するための「視点場」を併せ示すため、「山梨県を代表する風景」と「視点場群」について検討を行った。

「視点場群」の抽出方法は図12のとおりである。

山梨県を代表する風景への眺めが得られる場所は県内広範囲に分布する。例えば、国土数値情報のメッシュデータを用いて、富士山の可視領域を求めると図12左上の図の着色範囲となる⁷⁾。一方、県内各地には、山梨県の歴史・文化を物語る資源（遺跡や自然・産業資源等）が多く存在する（図12右上参照）。両図を重合し、「山梨県を代表する風景」を眺めることができ、かつ山梨県や県内各地についての理解を深めることもできる、山梨県の歴史・文化を物語る場（視点場、視点場群）を抽出する。

次に、総合的な取組方策として、「山梨の大観」と「山梨県の歴史・文化を物語る視点場」という組み合わせからなる地域資源を保全、活用するための地域振興方策を検討した。複数の市町村に跨る、広域的景観形成の取組

として、関係する市町村が連携して実施する「山梨の大観」を活用する回遊ルート制度（案）⁹⁾である。

上記の回遊ルートは、「山梨の大観」を望め、かつ山梨県の歴史・文化を物語る複数の視点場および視点場群をつなぐルートを設定して（図14、15参照）、「山梨の大観」という共通テーマのもと、地域を学び、楽しむことができる新たな観光ルートとして、来訪者の回遊促進に資するものである。

具体的には、上記の回遊ルートを旗印に、同ルート周辺の観光拠点、地域産物を楽しめるレストランや農産物直売所等観光スポットの紹介、観光拠点、観光ルート等の景観整備、「山梨の大観」を眺めることができる視点場の創出、ルート周辺の農地保全等、取組の総合化を図ることを目指す方策案である。方策案の内容は、図16のとおりである。

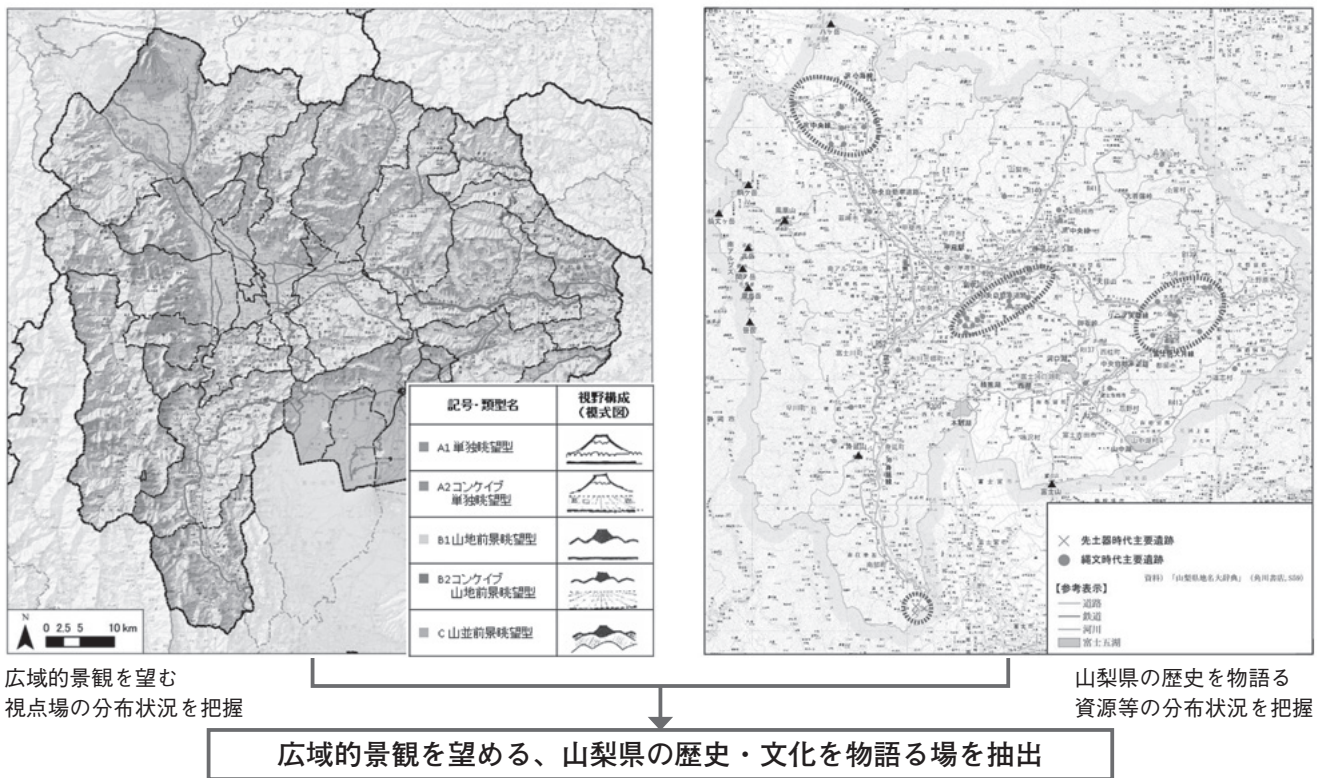


図12. 視点場群の抽出方法



図13. 山梨県の歴史・文化を物語る場からの富士山

かつて地域の重要な拠点であったことを示す飯米場（はんまいば）遺跡内の穂坂小学校校庭から御坂山地、富士山への眺め。この場から富士山への眺望体験を通じて、県土とわがまちの関係を捉えるとともに、視点場の歴史、文化を学び、地域への理解を深める⁸⁾。

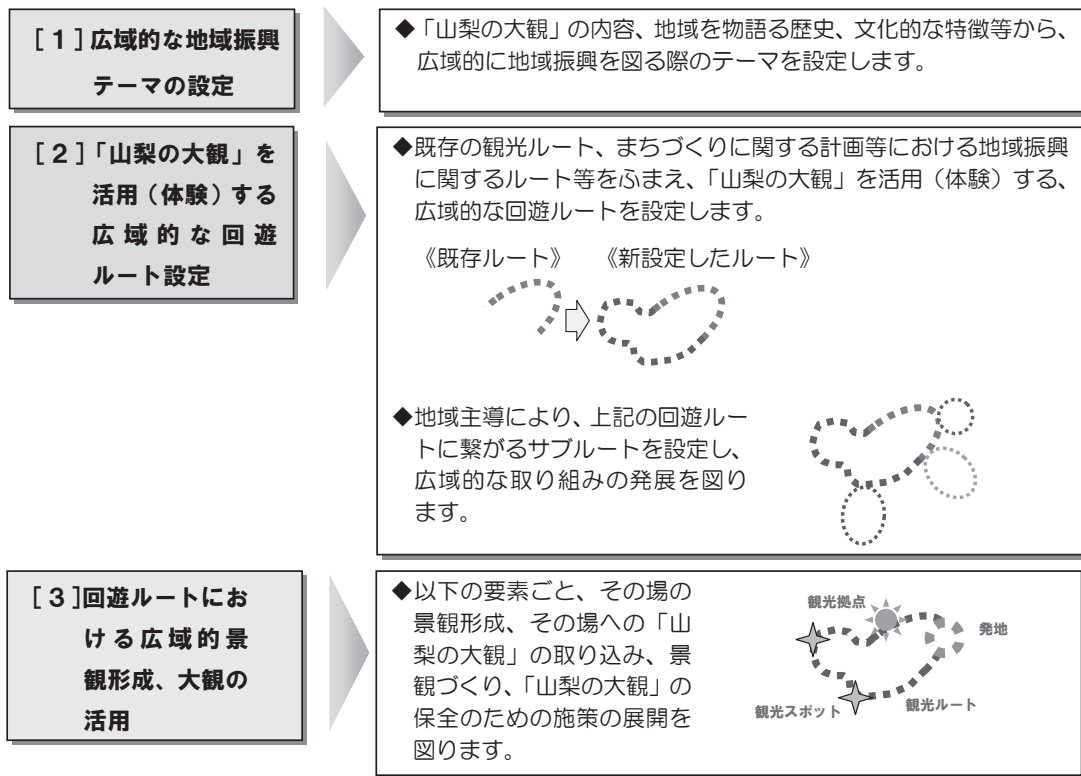
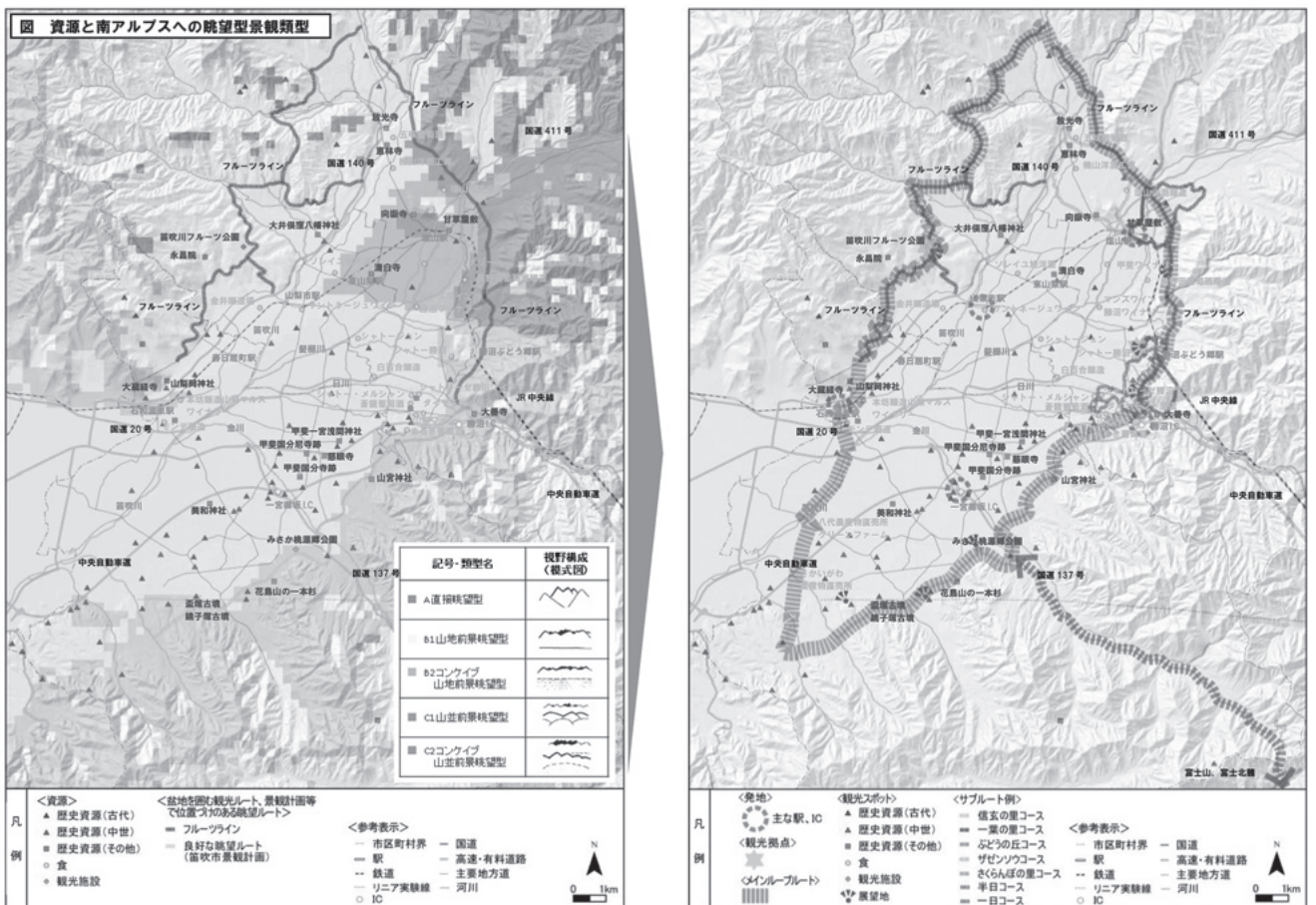


図 14. 回遊ルートの設定の考え方



峡東地区における、山梨の歴史・文化を物語る重要な資源と山梨の大観（南アルプス）の可視領域・眺望類型図との重合から（左図）、回遊ルート（右図）を検討した事例¹⁰⁾



図 16. 総合的なプロジェクトの展開イメージ

■ 推進方策イメージ

〈1〉 広域的景観形成の実施体制の整備

・「山梨県景観行政団体連絡会議〇〇地域部会」等を活用するとともに、特定テーマごとに地域の関連団体等が参画する下部組織を設置する。

〈2〉 広域的景観形成の実施の取組

■ 複数の市町村に跨る景観について特定の項目の景観形成基準の統一化（例えば、果樹地の擁壁のデザイン、素材等）

■ 広報、情報提供

■ 公共施設、公共空間、民間施設（店舗、宿泊施設等）における展望空間の創出、身体座の整備

4. おわりに

「計画」とは極端な表現を用いれば、策定に携わった人々の「思い」にすぎない。この思いを実現しなければ計画は夢幻のままである。

本稿では「地域資源保全のための計画策定の視点と方法」として、対象とする地域資源とその地の風土、人々との関係を把握した上で地域の将来像を具体的に検討し、その実現方策を検討する際の視点と方法を報告した。報告した各業務で留意していたことは、「計画」をいかに持続的に実践し、将来像の実現を目指すか、その道筋を計画に組み込むことである。

さらに、本稿では「計画」の期間を概ね10年程度と想定しているが、最近10年の社会経済動向がめまぐるしく変化してきた状況から察することができるように、地域においても計画期間内に様々な状況変化が生じることが想定される。そのような変化に柔軟に対応し、計画実現に関わる主体が計画に定める方策の方向を修正できるようにしくみを計画に内包させることが重要な課題で

あると考えている。

昨今、「新しい公共」¹¹⁾への期待が高まっている。計画策定段階から多様な主体の協働体制の基となる組織を形成することは、上記のしくみを機能させるために大変有効である。また、「新しい公共」を構成するであろう地域のコミュニティは、近年その機能の衰退が危惧されている。そのため、「地域資源保全のための計画」は、地域のコミュニティの維持、再生に資するものとなることが望まれる。

加えて、「視点3」では、将来像実現のためには複数の施策を総合的に実施、展開することが重要であることを指摘した。そのような取組において、「地域資源」は、取組を行う主体の意識を束ねる役割を担うこととなる。当該地域において、その地域資源の重要性を多様な主体が共有することにより、施策の総合的な実施、展開が円滑に進むと考える。

以上から、「地域資源保全のための計画策定」においては、広義の意味でのまちづくりに繋がる視点が重要であると考える次第である。

【注および文献】

- 1) 本稿では、地域資源が立地する場の地形等、物理的な文脈だけでなく、歴史・文化的な文脈も含めて用いている。
- 2) 「エコミュージアム」は様々な解釈がなされている。日本エコミュージアム研究会では、G・H・リヴィエールが提唱したフランスにおけるエコミュージアムの「発展的定義」を踏まえ、日本的に解釈した、「エコミュージアム憲章2009」を採択している。同憲章において、「エコミュージアム」の定義を「地域社会の内発的・持続的な発展に寄与することを目的に、一定の地域において、住民の参加により環境と人間との関わりを探る活動としくみである。」と定め、その「対象」、「活動」、「しくみ」の内容について示している。山中湖村においては、上記の考え方を踏まえ、「山中湖村民の暮らしや生活からあふれる魅力を掘り起し、まちづくりに活かす」ことを目指して各種取組が展開している。
- 3) 山中湖村 (2014) : 「平成25年度 山中湖村エコミュージアム基本計画策定のための基礎調査業務 報告書」
- 4) 使用する人間がガリバーになったように感じる大きな地図のこと。実際に、地図の上に乗る、地域の全体像をつかみつつ、特定の場の情報を得ることが可能である。山中湖村では、縮尺が約1,750分の1、約6m×7mの地図を使用した。
- 5) 取組の全体像は下記の報告に詳しい。
飯島忠昭・安河内泰男・吉田禎雄 (2003) : 「平良市における農村振興総合整備を契機とした体験・滞在・交流型観光の展開方策の検討」: 『CLA JOURNAL』 No.157 p.p.6-7
- 6) 中村良夫 (2010) : 『都市をつくる風景 「場所」と「身体」をつなぐもの』; 藤原書店 323pp
- 7) 国土数値情報のメッシュデータを用いて、視点場から見ることが可能なメッシュの解析結果を示したものであり、地形の上に存在している建築物や工作物、樹木等は解析上考慮していない。
- 8) 山梨県の金峰山山系の西麓、韭崎市に、縄文時代以降の遺跡として飯米場遺跡が存在する。集落跡が確認され、遺跡範囲は穂坂小学校を中心に倭文神社境内などを含み、現在も歴史的な環境が形成されている。また、同地には、江戸時代に朝穂堰(用水路)が築かれ、朝穂堰水配役人詰所が配置されるなど、地域の重要な地区として発展した。山梨県内の山麓地における農地の開拓史を想いつつ、富士山への大観が得られる場所の一つである。このような場所を「広域的景観を望める、山梨県の歴史・文化を物語る場」としている。
- 9) 山梨県 (2014) : 「山梨の大観」 p.p.18-19
- 10) 複数市町村が共通の「コンセプト」で事業を展開するための旗印として、特定のテーマを持ち、複数の市町村に跨る観光ルートを検討したものである。ここでの特定テーマは、甲斐の歴史を学び、ブドウやモモなどの特産品を楽しみながら、山梨県を代表する山々の南アルプス、富士山、八ヶ岳等への眺めを体験するという内容である。本ルートの沿道には、古墳、甲斐国分寺跡、戦国時代の武田家にちなむ歴史的資源が立地し、丘陵地のブドウ棚等の文化的な景観が展開する。1つの基幹観光ルートを設定し、そこに各市町村が推す既存のまち歩きルートが接続するように考慮している。
- 11) 従来、主として行政が担ってきた地域づくりについて、行政だけでなく、多様な民間主体を地域づくりの担い手として捉え、そのような担い手を「新たな公共」と表現する。(資料: 国土交通省H.P.)

Abstract: This study report deals with the viewpoints and methods for the planning of the conservation of local resources. Three important viewpoints in planning the conservation of local resources are highlighted, for each of which a planning method is explained with an example based upon our experience of actual projects. The first viewpoint is about the importance of understanding the historical context of the presence of "local resources". In relation to this viewpoint, a report is given about a method of obtaining the understanding of the context through workshops with the participation of local residents. The second viewpoint is about the importance of making a concrete image of the future vision of the local community. In this respect, a report is given about a method of translating the future vision of the local community into a story. The final viewpoint is about the importance of drawing a roadmap in the planning stage for implementing multiple measures in a cross-sectorial manner under an overarching strategy. For this, a report is given about a method of exploring landscape-related measures for the enhancement of local economy from a comprehensive perspective, taking advantage of regional landscape development.